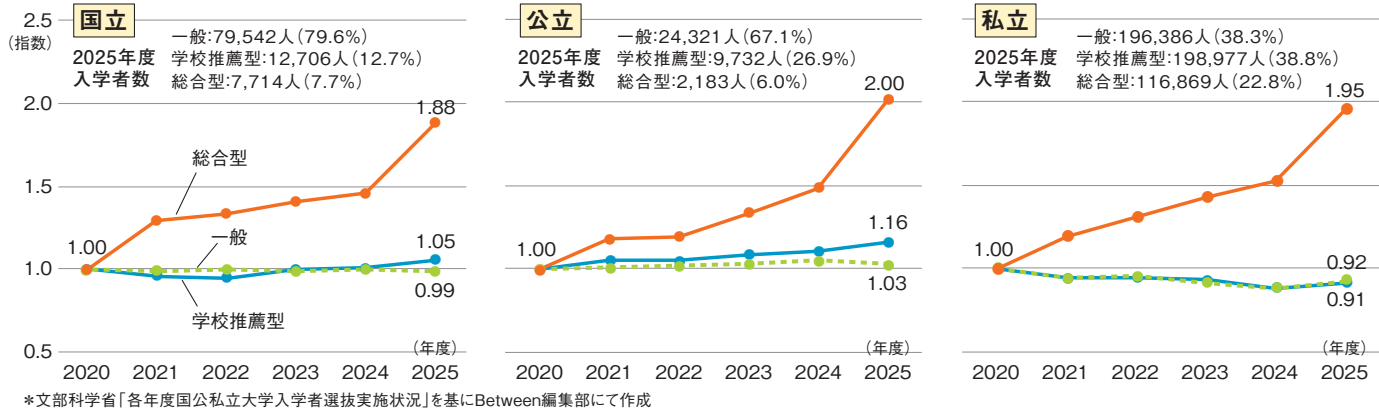
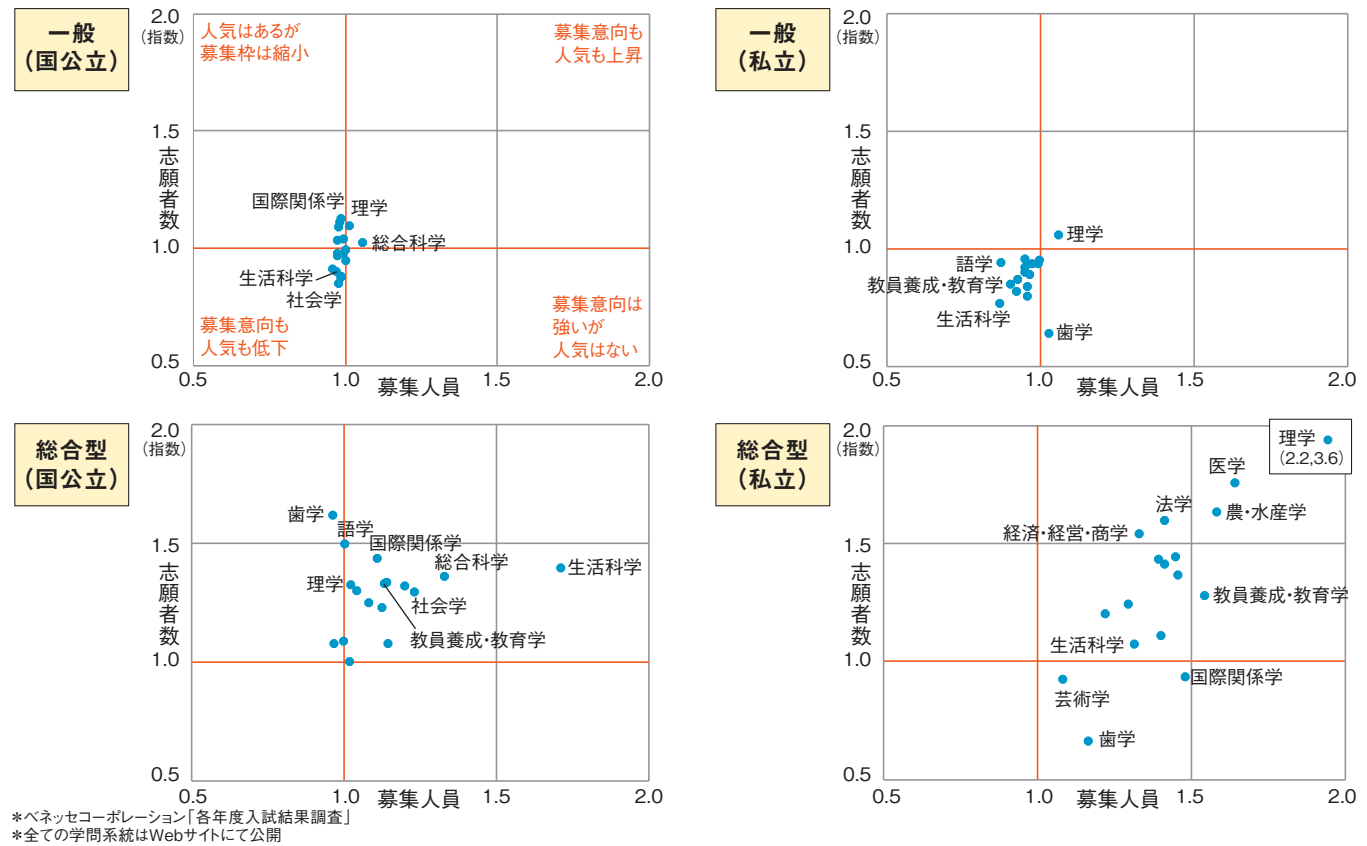


【図表2】〈各選抜〉入学者数5か年推移（2020年度入試を1.0としたときの指数）



【図表3】〈学問系統別〉募集人員×志願者数の変化（2023年度入試を1.0としたときの2025年度の指数）



総合型8%・学校推薦型13%、公立が一般67%・総合型6%・学校推薦型27%、私立が一般38%・総合型23%・学校推薦型39%で、国公私立大学の学生募集の主な選抜方法は依然として一般選抜だ。ただし、5か年の変化を見ると、どの設置区分でも総合型での入学者数を増やしていることがわかる。

こうした状況下、私立大学で、基礎学力の高い入学者の獲得と、国公私立大学の併願校戦略で、学力検査を課す年内入試導入の動きが全国的に広まった。だが、高校関係団体がこれを一般選抜の前倒しとして問題視したことに端を発し、年内入試での面接が必須化された（P.15参照）。

【図表3】は系統別の募集力を見るため、志願者数と募集人員の変化を示したグラフだ。募集人員は大学の意向、志願者数は受験者の意向と捉えられる。例えば、国立では一般の募集人員を総合型に移した生活科学は志願者数が増えている。学部系統と総合型の相性が良かったといえる。私立では、選抜型にかかわらず理学が人気だ。一方、歯学は国公立大人気が高いこともあり、総合型での募集人員増加が志願者の増加につながっていない。学問系統による選抜型との相性も一つの観点だろう。

【図表1】これまでの入試政策の流れ

■主要提言・答申

2013年10月	教育再生実行会議第四次提言	「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」 多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換／ 新たな試験の導入／外国語等の外部検定試験の活用
2014年12月	高大接続改革答申	「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について ～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」 高大接続改革実行プラン：高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革／「知識・技能」のみならず「思考力・判断力・表現力」 「主体性・多様性・協働性」＝真の学力の育成・評価
2021年7月	大学入試のあり方に関する検討会議提言	記述式問題の出題のあり方、総合的な英語力の育成・評価のあり方、 新学習指導要領への対応（「情報」教科等）

2026年5月 令和9年度大学入学者選抜実施要項 【入試方法】総合型選抜・学校推薦型選抜・面接による評価を必ず行う

■大学入学者選抜改革の進捗状況

	主な改革内容	進捗状況
1. 大学入学共通テストの導入・改革	①大学入試センター試験から大学入学共通テストに転換し（2021年度～）、思考力・判断力・表現力等をより重視 ②主体的・対話的で深い学びを実現するための新学習指導要領に対応した入学者選抜の実施（2025年度～）	①現役高校生の約半数が大学入学共通テストを受験 ②「情報」は全受験者のうち65%以上が受験
2. 個別大学における入学者選抜改革	①「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する入学者選抜への改善 →区分を変更し、一般選抜のほか、志願者の資質・能力を丁寧かつ確実に評価する総合型選抜、学校推薦型選抜を推進 ※教科・科目に係る個別テストや共通テストの他、調査書、小論文、資格検定試験、面接、志望理由書、推薦書等を適切に組み合わせて評価 ②入学者の多様性確保 →家庭環境、居住地域、国籍、性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者、その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になる者を対象に、志願者の努力のプロセス、意欲、目的意識等を重視する評価方法を推進	①入学者の5割以上が総合型・学校推薦型で入学。一般選抜においても「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を十分に評価するため、多様な評価方法を推進 2025年度入学者選抜における入試方法別入学者割合（国公私計） ②国公私立大学では、多様な背景を持った者の選抜に取り組む大学は121大学

※文部科学省「大学入学者選抜改革の最新の動向」（2026年）を基にBetween編集部にて作成

まずは、学生募集に最も影響を与える入試政策を振り返ってみたい【図表1】。2013年、当時の内閣が21世紀にふさわしい教育体制の構築を目的に発足させた「教育再生実行会議」が、第四次提言で大学入試に言及した。これを受けて中教審が高大接続改革の必要性を答申で提言。文科省が「高大接続改革実行プラン」を作成した。その後、共通テストでの英語外部試験活用の見送りなどを受け、「大学入試のあり方に関する検討会議」が発足。同プランの軌道修正を含む提言がなされた。

一連の議論によりセンター試験は共通テストに移行。思考力を問う出題が増えた。個別入試も「学力の3要素」を評価する入試へと転換が図られている。資質・能力を丁寧に見る総合型選抜の入学者割合は、約20%に高まった。

設置区分別に見ると【図表2】、2025年度の各選抜のおよその入学者数割合は、国立が一般80%、

※参考：2020年度は約11%

総合型選抜が拡大し
年内入試で面接義務化

大きな変更のあった入学者選抜実施要項と、設置認可申請制度、現状の課題と、今後の学生募集に与える影響を考える。

取材・文／見山雄介

文科省に聞く！



大学入試改革の進捗と
高大接続に関する大学への期待は？

高等教育局 大学振興課
大学入試室 室長
田島 博樹

たじまひろき●2006年文部科学省入省。研究開発局環境エネルギー課課長補佐、初等中等教育局児童生徒課課長補佐、同教育課程課専門官、研究振興局大学研究基盤整備課大学研究力強化室専門官、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部一等書記官などを経て、2025年より現職。

——大学入試改革の進捗に対する認識は？

小中高でバランスよく伸ばした学力の三要素を、大学入試で総合的に評価し、大学教育に引き継ぐという高大接続の理念は、徐々に理解が広がってきたと思います。共通テストでは思考力・判断力・表現力を重視する出題がなされ、センター試験とは明らかに変わりました。

2025年度入試から導入された「情報」は、共通テスト受験者の65%以上が受験しており、定着してきていると考えます。デジタル化が進む時代に、その土台となる能力を入試で評価する重要な一歩です。大学側が個別に問題を作る負担は大きく、共通テストで質の高い問題が出題されることにより、その利用ができることはありがたいとの声もいただいています。

各大学の個別試験でも、学力の三要素を多面的・総合的に測る総合型選抜や、英語4技能を外部検定試験の結果で評価する入試、多様性を確保するための取り組みなどが着実に広がっています。一方で、大学には、3つのポリシーの実質化が求められています。例えば、アドミッション・ポリシーが入学者選抜にどう落とし込まれているか。その精緻さは、大学によって差があるように感じます。また、入試方法を総合型、学校推薦型、一般と区分したことには明確な意図があります【図表5】。総合型の入試開始時期が早いのは、受験者一人ひとりの丁寧な評価に時間をかけるべき入試だからです。単に募集時期を早めただけのような、本来の趣旨とは異なる運用も残念ながら見受けられます。

——年内入試のルール変更の内容は？

学力検査が評価の大半を占める、一般選抜に近い形の学校推薦型・総合型の入試について高校関係団体などから問題が提起され、本省が設置する大学入学者選抜協議会で議論しました。総合型の趣旨は意欲や適性を丁寧に见ることです。「学力型」と銘打ち、学力を主たる評価対象とする考え方は、趣旨と矛盾しています。2024年12月に、学力検査は2月以降の実施を遵守するよう通知を出し、その後2026年度入試においては、小論文や面接と組み合わせて多面的・総合的評価を行うことを条件に、2月以前の学力検査の実施が認められました。しかし、なお「実質的な一般選抜」が行われている状況に鑑み、総合型、学校推薦型では面接を必須とするルールを設けることになりました。各選抜の趣旨をふまえた入試の実施を願っています。

——大学入試、高大接続の今後の課題は？

進学者減時代の大学経営を考えると、入試の設計はますます重要になります。なぜなら、入試の質の向上が教育の質の向上、育成する人材の質の向上につながり、さらに自学の価値を高め、

それが経営に安定をもたらすからです。

高校教育、入試、大学教育はつながっています。入試の質の低下は高校の教育の質を損ね、結果的にそれを大学で補填することになるでしょう。逆に、大学が高校教育を理解し、そこでの学びを基盤として、大学教育の質をいかに高めるかという視点で考えれば、その両者をつなぐ入試の質も必然的に高いものになるはずです。少子化が進む中では、とにかく多くの受験者を集めて選抜を行うという考え方だけでは立ちゆかなくなるでしょう。2025年2月の中教審答申にもあるとおり、「知の総和」を最大化するためには、文理横断・文理融合教育の重要性をふまえるとともに、多様な背景を持つ受験者一人ひとりを丁寧に多面的に見て、入学後の教育にもつながる入試を考えていく必要があります。

——大学への期待、メッセージは？

教育の質を高めるためにも経営のためにも、各地域の中で自学がどのような役割を担うのかを正面から考えてほしいと思います。学内だけで完結せず、自治体や経済界、高校などと連携して、地域に必要な人材、小中高も含めた教育のあり方を話し合っしてほしいのです。

入試は教育活動の一環として行われるものです。どのような大学入試をしたら高校教育と大学教育の質が高まるのか、広く関係者との対話を通して深めることを期待しています。入試科目や評価方法に工夫の余地があるのではないのでしょうか。地域のため、学生のための3つのポリシーを打ち立て、ポリシーと整合した入試を組み立てていく。その積み重ねが、大学に信頼と募集力をもたらすはずです。

【図表5】入試方法（令和9年度大学入学者選抜実施要項）

一般選抜	学力検査、小論文等を主な資料とし、調査書、面接、入学志願者本人の記載する資料等を組み合わせる。
総合型選抜	詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせつつ、以下の点に留意して総合的に評価・判定する。 ①志願者本人の記載する資料（活動報告書、入学希望理由書、学修計画書等）を必ず評価に活用 ②志望する学問分野に対する意欲や適性等に係る面接による評価を必ず行う ③「教科・科目に係る個別テスト」「大学入学共通テスト」「小論文・面接・実技検査等」「資格・検定試験等の成績」のうち少なくともいずれか一つを必ず活用 ④高度な専門知識等が必要な職業分野の人材を育成する学部は、志願者の意欲・適性等を特に重視
学校推薦型選抜	出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、以下の点に留意して評価・判定する。 ①面接による評価を必ず行う*1 ②教科・科目に係る個別テスト、大学入学共通テスト、小論文・面接・実技検査等、資格・検定試験等の成績のうち一つ以上を必ず活用 ③推薦書の中に学力の三要素に関する評価について記載

※面接はディベート、集団討論、プレゼンテーション、口頭試問等を含む（オンライン可）
*1 非公募型で、合格した際には入学することを確約して受験するものは、大学が面接の可否を判断できる
*文部科学省「令和9年度大学入学者選抜実施要項」よりBetween編集部にて抜粋・加工

【図表4】2026年度入試の一般選抜で志願者数が増加した私立大学例

大学名	年度	2026	2025	2024	2023	2022	26/22	2026年度の増加の主な要因
北海学園大学		9,455	7,370	6,629	6,557	7,207	131%	●統一型入試導入による併願拡大
高崎商科大学		1,325	919	700	577	697	190%	●前期と後期の2期制に ●4科目型新設 ●英語外部検定利用導入
敬愛大学		535	330	266	347	473	113%	●外部試験利用方式でみなし得点化により国語のみで受験可に ●複数学部受験の検定料同額の浸透
亜細亜大学		9,225	7,127	5,959	7,719	7,157	129%	●健康スポーツ科学部新設 ●共通テスト利用方式の入学検定料併願割引制度を変更
桜美林大学		52,830	29,714	10,011	11,793	12,651	418%	●検定料割引制度の浸透 ●指定科目を数ⅡC →数ⅡB に変更
芝浦工業大学		53,158	38,507	35,384	36,687	37,866	140%	●システム理工学部改組および定員増 ●共通テスト利用方式変更（私立専願者向け、国公立併願者向け）
成蹊大学		30,688	22,279	21,481	18,435	19,475	158%	●国際共創学部新設 ●英語外部検定利用導入 ●カリキュラム改編、新施設整備
東京経済大学		12,958	10,627	9,022	8,523	9,521	136%	●共通テスト利用方式（2教科型）で試験科目拡大 ●対面広報の強化、受験生サイトのリニューアル
東京農業大学		25,655	23,078	21,522	21,423	21,894	117%	●積極的な対面広報
日本大学		111,902	92,232	75,839	98,506	93,770	119%	●併願割引制度の拡大 ●英語外部検定利用拡充
日本女子大学		12,050	9,137	8,239	9,702	10,048	120%	●全学部・学科で複数日受験を可能に ●選択科目の増加・検定料の併願割引拡大
新潟青陵大学		727	619	553	591	638	114%	●同一学部内での併願制度導入（最大3学科出願可能） ●ホームページおよび受験生サイトの刷新
愛知大学		29,164	20,739	19,412	19,496	20,014	146%	●入試制度を大幅に変更 ●英語の出題方式・配点を変更 ●同一学部・同日程で複数方式の併願を可能に
名城大学		58,144	46,208	42,649	38,719	39,496	147%	●受験料割引制度導入 ●方式の対象学科の拡大
京都産業大学		40,946	31,755	30,470	38,275	37,735	109%	●文化学部改組、アントレプレナーシップ学環新設 ●文化学部と法学部で学科併願制度導入
京都先端科学大学		2,844	1,089	996	1,211	1,261	226%	●共通テスト利用入試の受験料無料化 ●特定学部学科の併願受験料無料化
京都橋大学		21,943	16,325	12,013	14,380	15,160	145%	●デジタルメディア学部を含む3学科新設、学科改組 ●学科併願可能数増加 ●特待生制度の拡大
追手門学院大学		27,551	20,476	18,368	19,032	18,985	145%	●理工学部の併願制度充実
関西外国語大学		11,948	7,686	6,111	5,705	4,224	283%	●英語国際学部英語国際学科に専攻を新設 ●入試方式の拡充 ●英語の試験でリスニングを廃止
阪南大学		5,332	2,974	2,875	2,686	3,880	137%	●一般入試（前期）に新選抜方式を導入 ●給付型奨学金制度の大幅拡大
大和大学		16,320	13,361	13,158	11,138	13,089	125%	●複数学部で入試科目（範囲）および配点・時間変更
岡山理科大学		9,843	8,012	6,393	7,170	7,308	135%	●入試制度変更 ●特待生・奨学生制度の拡充
立命館アジア太平洋大学		2,711	1,897	1,776	1,417	1,878	144%	●入試方式（2科目型）追加 ●英語外部検定利用の拡大

*志願者数は進研アド調べ、要因は各大学Webサイト、ヒアリングを基にBetween編集部にて作成

新設による新規層獲得と
受験負担減施策が相次ぐ

多くの私立大学が年内入試へとシフトしているが、一般選抜での志願者獲得も重要だ。2026年度に2か年連続で志願者を増やした大学をいくつか紹介しよう【図表4】。

2026年度に志願者数を増加させた施策には、主に新設改組等による「新たな層の獲得」と、入試方式や科目変更、受験料の負担軽減など、「受けやすさの工夫」が挙げられる。学生募集の戦略には、エリア、学問分野などのターゲットを広げる方策と、接触者を囲い込み、出願・入学に確実に導く方策があるだろう。ここ5か年で志願者数を4倍にした桜美林大学は、2025年度に導入した同一日程での学群併願無料制度の効果が大きい。探究プログラムの高校への提供（ディスカバリー）による認知、志望者の拡大も背景にあると考えられる。

進学者減時代を控え、入試は「より早く、より受けやすく」なることが予測される。しかし、教育の質の向上が求められる今、どの学生を入学させるかが自学の教育のあり方に直結するため、入試と教育は両輪で見直すべきだろう。

*年内入試での面接必須化については、Between情報サイトの記事も併せてご覧ください。https://between.shinken-ad.co.jp/detail/2026/06/nyushi.html

撮影／亀井宏昭